MINGEI: The Beauty of Everyday Things

2023 7/8 (sat.) – 9/18 (祝 mon.)

MINGEI
美は暮らしのなかにある
民藝
プレスリリース

大阪中之島美術館
NAKANOSHIMA MUSEUM OF ART, OSAKA

［上から］緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸 1931 年頃／流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28 年頃／藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935 年頃　いずれも日本民藝館蔵　Photo: Yuki Ogawa

民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある

展覧会概要

展覧会名	民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある MINGEI: The Beauty of Everyday Things
会期	2023年7月8日(土)–9月18日(月・祝)
会場	大阪中之島美術館 4F展示室 〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-1
開場時間	10:00–17:00(入場は16:30まで)
休館日	月曜日(ただし7/17(月・祝)および9/18(月・祝)は開館)
主催	大阪中之島美術館、朝日新聞社、東映
協賛	凸版印刷
特別協力	日本民藝館
協力	静岡市立芹沢銈介美術館、カトーレック
監修	森谷美保(美術史家)
監修協力	濱田琢司(関西学院大学文学部 教授)

巡回情報

本展覧会は、大阪中之島美術館に続いて、福島、広島、東京、富山、愛知、福岡に巡回予定です。

企画趣旨

約100年前に思想家・柳宗悦が説いた民衆的工藝、「民藝」。日々の生活のなかにある美を慈しみ、素材や作り手に思いを寄せる、この「民藝」のコンセプトはいま改めて必要とされ、私たちの暮らしに身近なものとなりつつあります。本展では、民藝について「衣・食・住」をテーマにひも解き、暮らしで用いられてきた美しい民藝の品々約150件を展示します。また、いまに続く民藝の産地を訪ね、そこで働く作り手と、受け継がれている手仕事も紹介します。

さらに、昨夏までセレクトショップBEAMSのディレクターとして長く活躍し、現在の民藝ブームに大きな役割を果たしてきたテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Artディレクター)による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションも見どころのひとつです。

柳が説いた生活のなかの美、民藝とは何か、そのひろがりと今、そしてこれからを展望する展覧会です。

結び文座布団 芹沢銈介 静岡
1930年頃 個人蔵＊

＊の写真はいずれもPhoto: Yuki Ogawa

みどころ

1 大阪中之島美術館では初となる、民藝をテーマにした展覧会

2022年に開館し、近現代美術ファンから、現代的なブラックキューブの建物と空間デザインに魅了される若年層まで、幅広い人気を集めている大阪中之島美術館。同館では初めて、約100年前に柳宗悦が「民衆的工藝」として提唱した「民藝」についての展覧会を、開催します。

2 日本民藝館（東京・目黒）や静岡市立芹沢銈介美術館の所蔵する民藝の名品、約150件が集結

国内のみならず世界各地に目を向け、名も無き作り手たちが生み出す日用品にこそ「美」が宿る、と見出した柳宗悦の眼。本展では、柳らが集めた暮らしのなかにある美しい民藝の品々を中心に紹介し、「民藝ってなんだろう？」という初心者の方々にも親しみやすくご覧いただきます。

3 民藝の「いま、そしてこれから」に迫る展覧会

柳の亡きあとも、民藝運動はひろがりを見せました。また、日本の各地でも伝統を受け継ぎ、現在でも新たな職人や手仕事品が誕生しています。本展では、現在の民藝の作り手や産地を紹介。さらに、現代の生活に溶け込む「これからの民藝スタイル」を提案します。つくる人、つなぐ人、つかう人のコミュニケーションで続いていく、これからの民藝にも視点をひろげます。

4 展覧会特設ショップもお楽しみに

本展覧会の特設ショップでは、第Ⅲ章で紹介するMOGI Folk Artによる別注品の数々や、注目の染色家／アーティスト・宮入圭太さんが本展のためにデザインしたグッズ、そして各地のやきものやガラス、布など、職人がつくる民藝の品々を多数取り揃える予定です。どうぞご期待ください。

柳宗悦と民藝運動

「民藝運動の父」と呼ばれる思想家・柳宗悦（1889-1961）。東京、麻布生まれ。1910年、雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教哲学や西洋美術などに深い関心を持ち、1913年に東京帝国大学哲学科を卒業。その後、朝鮮陶磁、木喰仏の調査研究、収集を進めるなか、無名の職人が作る民衆の日用雑器の美に関心を抱いた。1925年には、その価値を人々に紹介しようと「民藝」という新語を作り、濱田庄司や河井寛次郎ら共鳴する仲間たちと民藝運動を創始する。1936年、日本民藝館を開設し、初代館長に就任。以後ここを拠点に、国内外各地への調査収集の旅、文筆活動や展覧会活動と、活発な運動を展開した。

［左から］
角酒瓶 小谷眞三 倉敷 1979年／
酒瓶 小谷眞三 倉敷 1985年頃／
栓付瓶 メキシコ 20世紀中頃
いずれも日本民藝館蔵 ＊

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

日本民藝館「生活展」会場写真 1941年

MINGEI

第Ⅰ章
1941生活展——柳宗悦によるライフスタイル提案

1941(昭和16)年、柳宗悦は自身が設立した日本民藝館(東京・目黒)で「生活展」を展開。民藝の品々で室内を装飾し、いまでいうテーブルコーディネートを展示しました。暮らしのなかで民藝を活かす手法を提示した、モデルルームのような展示は当時珍しく、画期的でした。

第Ⅰ章では実際に出品された作品を中心に、「生活展」の再現を試みて、柳が説いた暮らしの美を紹介します。

藍鉄絵紅茶器

濱田庄司 栃木 1935年頃 日本民藝館蔵

笹の葉の文様が描かれた濱田庄司の紅茶器セットは、柳宗悦が自宅で愛用したもの。ティーポットは日本の土瓶の形状を採用しており、日本家屋の室内で用いるのに相応しい姿を見せる。

スクロールバック・チャイルズアームチェア

イギリス 19世紀 日本民藝館蔵

1929年に柳宗悦と濱田庄司がイギリスから持ち帰ったウィンザーチェアのひとつ。テーブルと椅子を使う暮らしの伝統がない日本において、柳が優れた椅子として観たのは、イギリスの椅子であった。

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝——美しいデザイン

柳宗悦は、陶磁、染織、木工などあらゆる工芸品のほか、絵画や家具調度など多岐にわたる品々を、日本のみならず朝鮮半島の各所、中国や欧米などへ旅し、収集を重ねました。時代も古くは縄文時代から、柳らが民藝運動を活発化させた昭和にいたるまでと幅広く、とりわけ同時代の、国内各地で作られた手仕事の日常品に着目し、それらを積極的に紹介しました。

第Ⅱ章では民藝の品々を「衣・食・住」に分類し、それぞれに民藝美を見出した柳の視点をひも解きます。

裂織丹前（部分）越前 江戸～明治時代 19世紀 日本民藝館蔵＊

Ⅱ——❶「衣」を装う

“只被る為なら美しさ等どうでもいい。だが美しさは着たい気持をそそる。”

—柳宗悦『用と美』1941年

駒散し文様羽織
江戸時代 19世紀
日本民藝館蔵

江戸時代に下総国（千葉）に設けられた御用牧場で、牧士（馬の世話をする職）が身に付けた羽織。馬の世話役を将棋の駒で装う、洒落の効いた大胆なデザイン。

蓑
岩代檜枝岐 1930年代
日本民藝館蔵

かつての雨具であった蓑は日本各地で作られていたが、「ずばぬけて立派なのは北国の蓑である」（『雪国の蓑』1942年）と柳は述べている。本作は見た目とともに、着心地にも優れた福島産のひとつ。

民藝 MINGEI
美は暮らしのなかにある

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

木綿切伏衣
北海道アイヌ 19世紀
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

大胆な模様をあしらったアイヌの衣服。模様に不思議な生動感があり、紺、橙、白の配色も鮮やかで、芹沢銈介が収集したアイヌの衣装の中でも、特に印象的である。

黄八丈着物
伊豆八丈島 1920-30年代
日本民藝館蔵

東京・八丈島で生産される絹織物、黄八丈。島内の草木を用いて黄色、樺色、黒色の3色に絹糸を染め、染と乾燥を何度も繰り返すことで色彩を定着させ、縞や格子などの文様を手織りで作った。

MIN GEI

Ⅱ——❷「食」を彩る

“人間は美味を好む。だが料理だけに止めるのではない。
それを綺麗に皿に盛る。その皿さへも選擇する。”
—柳宗悦『用と美』1941年

スリップウェア角皿
イギリス 18世紀後半-19世紀後半
日本民藝館蔵＊

現代でも人気が高いイギリスのスリップウェアも、民藝同人らが日本に広めたやきもののひとつ。本作は柳旧蔵のスリップウェアの優品で、数多く作られたパイ皿であった。

網袋（鶏卵入れ）
朝鮮半島 20世紀初頭
日本民藝館蔵

藁編みの籠の中心に開いた窓から卵を入れるという、朝鮮の鶏卵入れ。上部の紐で吊るして、保管できるように作られている。

塗分盆
江戸時代 18世紀
日本民藝館蔵

第Ⅰ章
1941 生活展
――柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
――美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
――これまでとこれから

桐文行燈 江戸時代後期 個人蔵＊

Ⅱ――❸「住」を飾る

MINGEI

“暮しは色々なものを招く。それに応じて適宜な材料が選ばれ、適当な形が整えられる。”
―柳宗悦『用と美』1941年

（左上から時計回りに）
手箒
仙台郡山 1939年頃
鹿沼箒
下野鹿沼 1939年頃
手箒
信州 1939年頃
いずれも日本民藝館蔵

芯切鋏
京都 1920年代後半-1930年代前半
日本民藝館蔵

昭和戦前期の京都で作られていた、和蝋燭の芯を切るための仏具用鋏。切り取った芯が落ちないような造りや、握りやすさを考慮した柄など、機能性もよく考えられている。

色絵猪文タイル
オランダ 16-17世紀 日本民藝館蔵

円座
朝鮮半島 1930年代
日本民藝館蔵

柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司の3人は、1936年、1937年と2年連続で朝鮮を旅し、当時朝鮮で作られていた日用品を購入した。これは美しい模様と文字が編み込まれた座布団代わりの敷物・円座。

椅子
オーストリア 19世紀初頭
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

MINGEI

T O P I C

気候風土が育んだ暮らし——沖縄

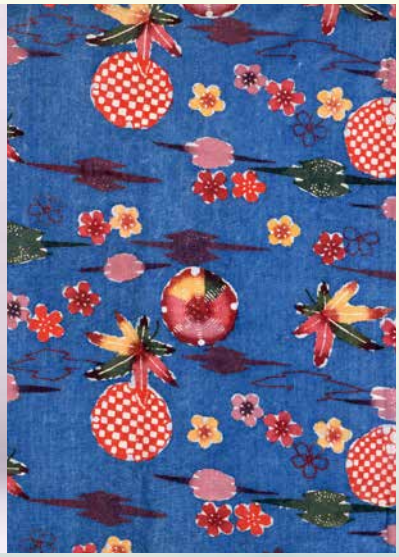
本土から遠く離れた沖縄は、古い歴史を持ち、独自の文化、風習を育んできました。第Ⅱ章最後では、柳が「奇跡」と称えた沖縄の民藝に焦点をあて、紅型、織物、陶器、漆器などにより、かつての沖縄の豊かな暮らしを顧みます。

芭蕉布絣着物
沖縄 19-20世紀前半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

クバ団扇
沖縄 1950-60年代 日本民藝館蔵

雪輪に桜楓文紅型着物
沖縄 19-20世紀前半
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

紅型は、南国らしい色鮮やかな沖縄の模様染である。模様の多くは、日本本土からの影響が強いが、季節感がなく、四季の模様が自由に取り込まれているところに特徴がある。芹沢銈介は、沖縄の紅型に出会って夢中になり、染色家としての道を歩み始めた。



第Ⅰ章
1941 生活展
――柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
――美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
――これまでとこれから

入れ子土鍋　グアダラハラ市近郊（メキシコ）
20世紀後半　静岡市立芹沢銈介美術館蔵

第Ⅲ章
ひろがる民藝――これまでとこれから

柳宗悦の没後も民藝運動は広がりを見せました。濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介が1972（昭和47）年に刊行した書籍『世界の民芸』では、欧州各国、南米、アフリカなど世界各国の品々を紹介。各地の気候風土、生活に育まれたプリミティブなデザインは民藝の新たな扉を開きました。

一方、民藝運動により注目を集めた日本各地の工芸の産地でも、伝統を受け継いだ新たな製品、職人たちが誕生しています。本展では国内5つの産地から、これまでと現在作られている民藝の品々や、そこで働く人々の“いま”を紹介します。

そして、本章最後では、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）の愛蔵品や、世界各地で見つけたフォークアートが“いま”の暮らしに融合した「これからの民藝スタイル」を、インスタレーション展示で提案します。

Ⅲ――❶『世界の民芸』――新たな民藝の世界

［左から］濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介『世界の民芸』朝日新聞社　1972年　個人蔵＊／靴下　アゼルバイジャン地方（イラン）20世紀後半　静岡市立芹沢銈介美術館蔵／人形　フニン県ワンカヨ（ペルー）20世紀後半　静岡市立芹沢銈介美術館蔵

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる「民藝」
——これまでとこれから

Ⅲ —— ❷民藝の産地 —作り手といま

昭和戦後期以降の日本のものづくりは機械での生産が主流となりますが、伝統を失わずに手仕事を続ける産地、失われた手わざの復活を試みる職人、新たな民藝を創作する人々が登場します。本展では 5 つの産地に焦点を当て、かつての品物と現代の製品、そこで働く人々のいまを紹介します。

小鹿田焼

おんたやき

大分県

＊

丹波布

たんばぬの

兵庫県

＊

鳥越竹細工

とりごえたけざいく

岩手県

＊

八尾和紙

やつおわし

富山県

＊

倉敷ガラス

くらしきがらす

岡山県

＊

第Ⅰ章
1941 生活展
——柳宗悦によるライフスタイル提案

第Ⅱ章
暮らしのなかの民藝
——美しいデザイン

第Ⅲ章
ひろがる民藝
——これまでとこれから

MIN
GEI

T O P I C

Mixed Mingei Style by MOGI

第Ⅲ章最後では、現在の民藝ブームを牽引する存在として活躍するテリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションを展開します。

テリー・エリス／北村恵子
（MOGI Folk Art ディレクター）自邸＊

MOGI Folk Art
モギ フォーク アート

東京・高円寺でMOGI Folk Artを主宰するテリー・エリスと北村恵子は、セレクトショップBEAMSのバイヤーとして活躍していた1990年代から、民藝運動とも関わりの深い日本の手工芸品を、服飾や北欧インテリアと組み合わせて紹介してきました。2003年にBEAMS内のレーベル「fennica」を立ち上げ、2022年には自身のショップMOGI Folk Artを新たにオープン。現在に至るまで「デザインとクラフトの橋渡し」をテーマに、国内の産地を回って見出したトラディショナルな民藝・工芸の品々を現代の暮らしに取り入れることでもたらされる豊かさを提案しています。作り手との交流を通じて、伝統的な技法やモチーフを活かしたオリジナルの別注品も数多く生み出しています。

MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子＊

民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある

トークイベント

「MOGI Folk Art ディレクターに聞く、豊かな暮らしのつくり方」

現代の暮らしやファッションにも溶け込む民藝の新たな価値や楽しみ方を、各地の作り手たちに寄り添いながら生み出し、伝えてきたテリー・エリスと北村恵子。民藝を手がかりとしたMOGI流豊かな暮らしのつくり方について、お話を伺います。

日時　2023年7月8日（土）　14:00〜15:30

会場　大阪中之島美術館 1階ホール　定員150名

登壇者　テリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）

聞き手　北廣麻貴（大阪中之島美術館学芸員）

参加無料
（要展覧会チケット）
事前申込制

※申し込み方法およびその他イベントは決定次第、大阪中之島美術館公式ホームページにてお知らせします。

展覧会公式サイト

https://mingei-kurashi.exhibit.jp/

展覧会公式SNS

@mingeiten　@mingeiten

アクセス

○京阪：中之島線「渡辺橋駅」（2番出口）より南西へ徒歩約5分／「淀屋橋駅」（7番出口）より土佐堀川を越え西へ徒歩約15分○Osaka Metro：四つ橋線「肥後橋駅」（4番出口）より西へ徒歩約10分／御堂筋線「淀屋橋駅」（7番出口）より土佐堀川を越え西へ徒歩約15分○JR大阪環状線「福島駅」・東西線「新福島駅」（2番出口）より南へ徒歩約10分○阪神「福島駅」より南へ徒歩約10分○大阪シティバス「JR大阪駅前」より53号・75号系統で「田蓑橋」下車、南西へ徒歩約2分○美術館には有料駐車場があります（割引サービスはありません）※詳細は美術館公式ホームページをご覧ください

お問合せ

大阪中之島美術館
NAKANOSHIMA MUSEUM OF ART, OSAKA

〒530-0005 大阪市北区中之島 4-3-1　TEL 06-4301-7285
（大阪市総合コールセンター・年中無休 8時〜21時）

https://nakka-art.jp

報道関係者お問合せ先

『民藝 MINGEI ―美は暮らしのなかにある』広報事務局（TM オフィス内）　担当：馬場・永井・西坂

TEL 06-6231-4426　FAX 06-6231-4440　E-mail mingei@tm-office.co.jp

チケット

観覧料

一般	1,700円（1,500円）
高校・大学生	1,300円（1,000円）
中学生以下無料	

●カッコ内は20名以上の団体料金。20名以上の団体鑑賞をご希望の場合、大阪中之島美術館公式ホームページから団体受付フォームにてお問い合わせください。●学校団体の場合はご来場の4週間前までに大阪中之島美術館公式ホームページの学校団体見学のご案内からお申込みください。●災害などにより臨時で休館となる場合があります。●障がい者手帳などをお持ちの方（介護者1名を含む）は当日料金の半額（要証明）。●一般以外の料金で観覧される方は証明できるものを当日ご提示ください。●本展は、大阪市内在住の65歳以上の方も一般料金が必要です。●展示室内が混雑した場合は、入場を制限する場合があります。●詳細は展覧会公式サイトで順次お知らせします。

チケットの主な販売場所 ※チケット購入時に手数料がかかる場合があります。
大阪中之島美術館公式ホームページ、ローソンチケット（Lコード：59222）、ローソンおよびミニストップ各店舗
販売期間：2023年4月8日－2023年9月18日まで

相互割引

本展観覧券（半券可）のご提示で、5階で開催される「Parallel Lives 平行人生 — 新宮晋＋レンゾ・ピアノ展」（2023年7月13日（木）－9月14日（木））の当日券を200円引きでご購入いただけます。1枚につき1名様有効。チケットご購入後の割引および他の割引との併用は不可。

企画チケット ※ローソンチケットでのみ販売

①オリジナルグッズセットチケット

宮入圭太 本展オリジナルアート サコッシュ

今、注目の染色家／アーティスト・宮入圭太さんの描きおろし作品があしらわれたサコッシュ（斜め掛けの小型バッグ）と、本展観覧券1枚がセットになったお得なチケットです。

販売価格：3,200円（税込） 数量限定

サイズ（約）：本体／横170×縦225mm
持ち手／幅10×長さ1150mm
素材・色：キャンバス、生成

●画像はイメージです。実際のデザインは若干異なる場合があります。
●チケット購入時に発券されるグッズ引換券を、本展会場特設ショップ（4階）にてサコッシュとお引き換えください（会期中のみ有効）。発送には対応しておりません。●セットのサコッシュの会場販売はありません。同サイズで別デザインのサコッシュを1,800円（税込）で会場販売予定です。

本チケット限定デザイン！

*

宮入圭太
（みやいり・けいた）

染色家／アーティスト。柳宗悦の思想に惹かれ、民藝を学び、民藝と向き合いながら作品を制作している。ユニクロのフリーマガジン『LifeWear magazine』2022年秋冬号の特集、表紙に採用され、2023年1月には伊勢丹新宿店で作品展を開く等、注目を集める。本展のために描きおろした型染作品を、本展オリジナルグッズとして展開、販売予定。

宮入圭太
本展
オリジナル
アート

②ワークショップセットチケット

ワークショップ「丹波布にふれて、つくろう」への参加と本展観覧券のセット券です。

兵庫県丹波地方で作られ、一度は衰退しながらも柳宗悦によってその美を見いだされた丹波布。作り手のお話を聞き、手紡ぎならではの手触りや草木染めの色合いを楽しみながら、小物をつくってみませんか。

講師：**イラズムス千尋**（丹波布技術認定者）

A. コースター作り：3,000円（税込）
B. ミニポーチ作り：3,500円（税込）

コースター	2023年7月22日（土） ①13:00－②15:00－（各回とも約1時間・定員20名）
ミニポーチ	2023年8月20日（日） ①12:00－②14:30－（各回とも約1時間半・定員20名）
会場	いずれも大阪中之島美術館 1階ワークショップルーム
持ち物	裁縫道具（縫い針、はさみ）

コースター

ミニポーチ

※画像はイメージです

●ミニポーチはカードケース大。写真の作品の柄・デザインはいずれもイメージです。●観覧券はワークショップ当日にご覧になれない場合、別の観覧日にご利用いただけます。●定員に達し次第、販売終了。詳細は展覧会公式サイトをご覧ください。

*

イラズムス千尋
（いらずむす・ちひろ）

丹波布作家。岡山在住時にウールの糸紡ぎと染織に出会う。丹波市に移住後、丹波布の存在を知り、丹波布伝承館にて布作りを学ぶ。同館講師を務めた後、自宅工房にて、手で紡ぎ草木で染めて織り上げる布にこだわり、日々制作に励む。

左上から時計回りに：
［左から］角酒瓶 小谷眞三 倉敷 1979年／酒瓶 小谷眞三 倉敷 1985年頃／栓付瓶 メキシコ 20世紀中頃 いずれも日本民藝館蔵、八尾和紙（富山）、［上から］竹行李 陸中鳥越 1930年代／刺子足袋 羽前庄内 1940年頃 いずれも日本民藝館蔵、鳥越竹細工（岩手） Photo: Yuki Ogawa